

二〇二一年一〇月八日

秋色のカップ買ひもす陶の里
散らばつて牧馬の肥ゆる草千里
風通ふたび木屋のにほひけり
秋航の甲板で寿ぐ誕生日
平家塚さまようごとく秋の蝶
村祭り駐在さんもしんがりに
父恋し遺愛の松に虫すだく

二〇二一年一〇月七日

野ざらしの羅漢はなべて秋思顔
秋の野路愉しおしゃべりウォーキング
錦してアメリカ楓の並木道
丹波路の御仏めぐり秋惜しむ
団栗が溢るる吾子の宝箱
野仏のお目元に映ゆ曼珠沙華
秋日和釣りては放つ好々爺
身にしむや神木にあるナイフ傷
草木にこころ通はす秋山路

二〇二一年一〇月六日

葛刈つて谷は奈落を見せにけり
日と土の匂ひを放つ捨案山子
投句箱覗くがごとく小鳥来る
木曾川はエメラルド色秋深し
谷川に添ひし参道薄紅葉

二〇二一年一〇月五日

ログハウス砦のごとく秋桜
白壁に柿たわわなる旧家かな
片言の日々に増ゆる子小鳥来る

なつき

宏 虎

ともえ

きづな

よし女

雅 流

菜 々

わかば

こすもす

あさこ

わかば

有 香

うつき

きづな

なつき

百 合

よし子

宏 虎

きづな

なつき

わかば

こすもす

菜 々

菜 々

運針の指一と休めちちろ鳴く

一宿の山家の幸は零余子飯

萩の花散らして子らの鬼ごっこ

身に入むや一兵卒の小さき墓

二〇二一年一〇月四日

白壁の多き古町秋澄める

畦に腰おろし棚田の秋惜しむ

いづくなく闇の木犀よく匂ふ

一陣の風に大袈裟萩揺るる

こも斯く木屋にほふ散歩道

二〇二一年一〇月三日

上弦の月セコイアの天辺に

秋晴れの小さき園庭万国旗

孫からの声の便りに夜の長し

爽やかや窓全開す大聖堂

角曲がる度金木屋匂ふ路地

二〇二一年一〇月二日

山頂の城址に釣瓶落としの日

突風に脅されて散る稲雀

眼帯の取れて秋天展けけり

有 香

あさこ

よし子

ぼんこ

満 天

うつき

菜 々

ひかり

せいじ

菜 々

なつき

せいじ

せいじ

満 天

こすもす

宏 虎

わかば

毎日句会みる選・二〇二一年一〇月二日